

※ テニスンとリンカンシャー方言

島 根 国 士

I

英国ヴィクトリア朝の代表的詩人の一人であったA・テニスンの近年の名声は、作品の真価とは別に全くかすんでいる。だが、ごく最近その復活の兆がわずかながら見え始めているのは疑いのない事実である。約10年前にこの詩人の出身地リンカンシャーのリンカン市に本部を置き発足した英国テニスン学会の活動と、米国、カナダにおけるヴィクトリア時代に対する学問的興味の勃興がその原動力になっていると思われる。

この小論において、私はテニスンの音声的技巧を研究する上で最も重要な基礎となる彼の発音の分析と解明の端緒をつかむことを目的としている。その資料となるものは、1) テニスンの生存中また死後に友人、家族によって残された彼の発音に関する記録、2) 私が英国で行なった調査の一部であるリンカンシャー方言に対する実地調査によって得た音声資料である。

もとより、現在のところテニスンの発音の全貌を明らかにすることは不可能である。私の研究がいくら進んだところでそれは理想でしかないであろう。しかし、その最も顕著な特徴は、ある程度解明可能であると思われる。

テニスンの発音については、すでに孫にあたるC・テニスンがその立場を利用して論文を発表している。¹これは、しかし、論文と言うより、むしろ詩人の友人、家族の残した証言に次ぐ価値を持った資料と見ることができよう。論文としては分析力に欠けるうらみがある。

なお、私の得た2)の音声資料の機器による客観的で精密な分析はまだできておらず、以下発表するものは聴覚による分析の結果であり、従って表記も巾のあるものであること、また、テニスン自身による作品朗読のレコードは、聴覚による解説は殆んど不可能なため、今回は考察の対象としていないことを付記しておく。

II

テニスは、ケンブリヂへ入学するまで濃厚なリンカンシャー方言を話していた。²人間の言語習得が10代の前半までには完成し、その言語が条件により程度の差はあるにしても一生涯残るとするならば、リンカンシャー方言はテニスンの長い一生を通し全面的には消え去ることはなかった。彼は後にイングランド南部の各地に住むことになる。さらに教育、交際相手を通して彼の英語が序々に方言

的要素を落し標準音に近づく過程をたどったであろうことは想像に難くない。しかし、その反面出身地の方言の刻印が消えなかったことも事実である。C・テニスンもこのことを確言している。

Tennyson...retained all his life traces of the Lincolnshire accent, with which he had been familiar in his youth.¹⁾

テニスンの死後、彼の友人達の証言、自分の経験を集大成して父親の『回想録』²⁾を公けたしたH・テニスンは、その中で詩人は晩年に至っても故郷の土のにおいのする人々について彼等の言語で語るのを楽しみにしていたと言う。その一例として次の話をあげている。

Another story was of a Lincolnshire farmer coming home on Sunday after a sermon about the endless fires of hell and talking to his wife—'Noä. Sally, it woän't do, noä constitootion cud stan'it'.³⁾

この方言の部分を標準的な英語に書き直せばおそらくこうなるであろう。

'No, Sally, it won't do; no constitution could stand it'.

テニスンが話し、聴いて育ったこの方言は、晩年においてもその殆んどが抽象音声として記憶に残っており、時に応じ自由に再現が可能であったことをこの例は示している。

音声面を別にしても、リンカンシャー方言は詩人にとって表現上妙味のある言語であった。友人に語った言語がそれを証明している。

'How infinitely superior. 'he[Tennyson] said, 'is the provincial word *flitter-mouse* to the orthodox *bat*!'³

読者には殆んどかえり見られないが、テニスンの作品中には、この方言で書かれた詩が数編ある。これらは、現在ではリンカンシャー出身者の中でもこの方言に対する知識の豊富な少数の人々にしか理解ができならしい。これらがどのようなものは、「新式な北部の農夫」('Northern Farmer, Old Style')の冒頭を見ればある程度わかるであろう。

Wheer 'asta beän saw long and meä liggin' 'ere aloän?
Noose? thourt nowt o' a noorse: whoy, Doctor's abeän an'
agoän:

Says that I moänt 'a naw moor aäle: but I beänt a fool: Git
ma my aäle, fur I beänt a-gawin to break my rule.

これを音声表記すると次のようになる。

wiə ræstə biən so: lɒŋ n miə liɡɪnɪəʃ ələən nɜ:z ðaʊt no:t oə nɜ:z : wɒɪ, dɒktəz
 əbiən ən əɡoən
 səz ðæt ə moəntə no: moʃ əəl : bət ə biənt əful : ɡɪt mi mə əəl, fəʃ ə biənt əɡoɪn
 tə breɪk mə rul.

さらに標準的英語に直すところなる。

Where have you been so long and me lying here alone?
 Nurse? You're not at all a nurse: why, Doctor's been and gone:
 Says that I mustn't have no more ale: but I'm not a fool:
 Get me my ale, for I'm not going to break my rule.

こうして、リンカンシャー方言は非常に野趣と表現力に富んだ言語であることが感じられよう。事実テニソンはこれら一連の方言詩を楽しみながら書いたのであった。しかし、特異な表記方法のためもあり読まれないのは残念である。

Ⅲ

テニソンは自作の詩の朗読を楽しみ、得意とした。中でも長編「モード」('Maud')は彼の愛した作品の一つであった。この長詩の朗読を始めると、とどまることを知らず、友人達は最後まで魅了され聴き入ったと言われている。

彼の音声に関する証言はいく通りも残っている。その殆んどに共通する点は、それは朗朗とした低音の胸声音であったというものであり、これだけである程度彼の体格的特徴と発音の特徴をほうふつとさせる。しかし、多少意外なのは次の言葉である。

His[Tennyson's]voice is musical,metallic,fit for laughter
 and piercing wail.⁴

彼の音声に関する友人達の言葉には、彼が31才頃のものが多く、これもその一つである。それらを合せて考えると、彼の音声は相当の巾を持っていたことがわかる。

さらにE・フィッツジェラルドの証言は、テニソンの発音の特徴に関して有力な手がかりを与えてくれる上で特に重要である。

Mouthing out his hollow oes and aes,deep-chested music,
 this is something as A. T. reads,with a broad north country

vowel, except the u in such words as 'mute', 'brute', which he pronounces like the thin French 'u'. His voice, very deep and deep-chested, but rather murmuring than mouthing, like the sound of a far sea or of a pine-wood.⁵

英語は、例えば、日本語とその音声上の特徴を波形分析により精密に比較すれば、その子音性の高さに最大の本質が存在することが判明する。しかし、英語そのものを検討した場合、厳密には同時に母音性の高さも持つ。従って、英語のリズムにはその独特なストレスの作用による音節間の母音の持続時間を無視した本質が存在すると同時に、これを一定に保って韻律を形成し得る可能性を秘めている。この可能性が、英語の歴史上相当期間、古代ギリシャ語の詩の韻律を基礎とした韻律をその伝統の主流として実現させたのである。

上のテニソンの音声、構音に着目すれば、どちらかと言えば母音を朗々と響かせるのに適していたことが明らかになる。この特徴が彼の詩の韻律に生かされない筈はない。彼の詩には、壮大さ、重量感を感じさせる場合がしばしばある。音声的には母音の特徴がこれを可能にするのである。この意味において彼は、ミルトンの『失楽園』をすら思い出させることがある。

上の引用文は、明らかにテニソンの「アーサー王の死」('Morte d'Arthur')の序詞とも言うべき「叙事詩」('The Epic [Morte d'Arthur]')の中の行を踏まえている。

.....the poet little urged. But with some prelude of disparagement, Read, mouthing out his hollow oes and aes, Deep-chested music, and to this result.⁶

こうして我々は、テニソンの発音解明の糸口の有力な一部を得たことになる。以下、リンカンシャー方言音を鏡としてそれに照らしながら、彼の発音の最も顕著な特徴として上の引用文にあげられている点と他の一・二を分析することにした。

テニス生存中の方言と今日のこれとでは、教育の普及、マスコミ、交通機関等の発達という諸条件により大きく変っている。そこで、当時の特徴を少しでも多く残している音声資料を得ることが最大の課題であると同時に困難でもある。被験者の選択がその鍵を握ることは言をまたない。幸いに私は、「最後の純正なリンカンシャー方言の話し手」と目されている老年の男女の協力を得ることができた。男性の方は60代後半で、両親との縁がうすく、中期ヴィクトリア時代のこの方言を話す農民で文盲の祖父に育てられて成人している。女性の方は、テニソンの出身地サマーズビーのほんの近くの村の農家の出身で、現在90才に手がとどこうとしている。彼女は10代の前半を19世紀に過ごしたことになる。被験者として私の複雑で奇妙な要請に快よく、十二分にこたえてくれたこれらの人々についての記述は、これだけにとどめておく。

1. /o/^{LA}、/oə/^{LA} (LA: 'Lincolnshire Accent')

C・リックスの『テニソン詩集』が出版されるまで決定版であり、現在も重要な資料性を保っていると思われるエヴァースリー版には、テニソン自身の言葉として読者に対する次のような指示が記載されているという。⁷

Knowledge shone, knoll—let him who reads me
Always read with the vowels in these words long.

ここに、前掲の引用文に述べられている 'o' の綴りで表わされる音の詩人の発音の解明の手がある。

第一の言葉 'knowledge' を標準音で表記すれば ['nɒlɪdʒ] となる。これは D・ジョーンズの表記である。ロンドン大学の A・C・ギムソン、D・B・フライの二人が私に語ったところによれば、ジョーンズの『発音辞典』は本質的に 19 世紀の発音であり、彼はこの辞典が版を重ねても余り手を加えなかったという。⁸ であるから、ギムソンがその 13 版において大巾な改訂を加える以前のは、大部分 19 世紀の発音を伝えていると言ってもよいと思われる。以外、ここでは標準音の発音は全てこれの 12 版による。ただし方言音を含めた発音表記は、IPA を基礎にして私が考えたものである。

上の言葉 'knowledge' のテニソンの発音を知る上で重要な資料は、他に次のものがある。これも友人の証言である。

He [Tennyson] once rebuked me for pronouncing 'knowledge' in the way which is now usual, maintaining that the full sound of 'know' should be given.⁹

もしもテニソン自身が言うように 'know' の母音をそのまま、'knowledge' に持ち込むとすれば、標準音の表記では ['nɒvlɪdʒ] となる。しかし彼は同時にこれを伸ばせと言っている。とすれば ['no: lɪdʒ] となるであろう。この二重母音から長母音の移行は可能であろうか。これはあくまで方言音によって考える必要がある。

二人の被験者に 'know' を発音させると結果は次のようになる。

男: [noə] ; 女: [no:]

両者の違いは、しかし、普通の条件下の発音と強調との違いにある。同じ音素構造の 'no' を女性の方も [noə] と発音することがある。他の例に照して見てもこのことは言える。リンカンシャー方言では、この二通りの発音が共存しているのであり、一人の話し手でもこれらを使い分けるのである。従って、テニソンの 'know' の発音も [no:]、[noə] の両方が考えられる。これにより、'knowledge' も、['no: lɪdʒ], ['noə lɪdʒ]

になると思われる。だが、エヴァースリー版の中の彼の言葉と、C・テニソンの「例えば、'so' を 'soa' と発音することはなかった」¹⁰ という言葉をそのままとれば、上の最初の発音であったということもできる。しかし、二番目の発音がテニソンにおいて絶無であったとは考え難い。同様に、[eo] の可能性は完全にぬぐい難いにしても、'knoll'、'shove' も共に [no:l], [fo:n] と考える方が妥当であろう。後音は、標準音では [ʃɒn] となるが、実際にこの単語におけるこの母音の発音は短い。[ʃo:n] とは、好対照をなす。

以上の三つの単語に含まれる標準母音 [ɒ], [ou] に対応する方言音を 50 語以上を使って被験者により調べたところ、前者が [o:] または [oə] となる例は殆んどない。この移行はテニソンの個人的特徴であるかも知れない。'know'、'knowledge' の場合のように前者の母韻音(ぼいんおん)が後者にそのまま使用されるという現象は、同様の母音変化を持つ関係にある単語、例えば、'holy'、'holiday' 等に存在するかも知れないが、現在のところ明言はできかねる。反対に、後者 [ou] がリンカンシャー方言で [o:] または [oə] となる傾向はきわめて顕著である。むしろこれに注意すべきであろう。

From knoll to knoll, where, couched at ease.

('In Memoriam')

2. /æ/ LA, /e/ LA, /eə/ LA

次に上記引用文中の 'aes' の分析であるが この綴り ('a') で表わされる母音のうち、リンカンシャー方言音中最も特徴のあるのは、[æ]、[e:] または [eə] である。

標準音の [a:] は、この方言では前母音化が著るしく、例えば 'dance'、'plant' 等の単語においては次の関係を示す。

	RP	LA
dance	[da:ns]	→ [dæns]
	RP	LA
plant	[plɑ:nt]	→ [plænt]

この傾向はイングランド北部の発音に共通していると言われており、同時にテニソンの発音でもある。リンカンシャー方言ではこの母音は、激しく短かく発音されるのが特徴である。

'Tirra lirra,' by the river

Sang Sir Lancelot.

('The Lady of Shalott')

'Lancelot' の発音は ['lænslət] でなければ、この個所の効果は半減する。

次の特徴としては、標準音 [eɪ] がこの方言において [e:] または [eə] になることである。

RP LA LA
 rein [ˈreɪn] → [re:n], [reən]
 RP LA LA
 stak [ˈsteɪk] → [ste:k], [steək]
 RP LA
 day [deɪ] → [deə]

標準音の母音で [eɪ] で終る単語では [eə] となるのは興味深い。テニソンは大体において [e:] の発音をしたのであろう。

Break, break, break,
 ('Break, break, break')

これは [bre:k, bre:k, bre:k] となる。ここにも開音化の傾向が見られる。

3. /ju/ LA

フィッツジェラルドは、上のように、テニソンは 'u' の綴りで表わされる音を「細いフランス語の 'u' のように」発音したとしており、'mute'、'brute' の例をあげている。このフランス音とは、私には確信はないが、'peu' などに含まれる [ϕ] ではなかったかと思われる。これに対して、C・テニソンは、'ewe' [ju:] と殆んど同音であるとしている。¹¹ いずれにせよ、これは英音 [ju:] の異音の一つであらう。

テニソンは、標準的英語ではこれが使用されない単語にも用いていた。私の調査では、'Susan' [sju:zn], LA 'fruit' LA [frju:t] 等の単語に [ju:] ([ϕ] ではない) が使用されていること確かめたが、その法則性を明らかにするまでに至っていない。確言できることは、この音はリンカンシャー方言において多く用いられているということである。

As pure and true as blades of steel.
 ('Kate')

ここでは、'pure'、'true' に [ju:] あるいはテニソン独特の異音が含まれ、微妙な調和が生み出されていることに注目すべきである。

以上が、リンカンシャー方言を背景にしたテニソン自身の母音の最も主要な特徴である。他にも精密に比較分析すれば明らかになるものが一、二にとどまらないと思われるが、ここではもう一つの特徴を述べて子音に移ることにする。

4. /e/

リンカン市に保存されている「イン・メモリアム」の原稿を調べている時、私は一つの稀な綴りの単語を発見した。'Empassion'd' である。

Empassion'd logic, which outran.
 (CIX)

誤りでないにしてもこの綴りは稀である。それともヴィクトリア時代には一般的であったのか。

『詩集』の編者C・リックスは、他の原稿と比較検討したのであろうが、これを 'Impassioned' としている。私のこの時の印象では、この綴りがテニスの発音を暗示するのではないかというものであった。同じ接頭辞を持つ 'empress' の発音が ^{RP} ['empɪs] であるからである。上の単語の綴りが二通りあるうち詩人は、本能的に自分の発音通りの方を選んだのではなかったか。

私の調査で判明したリンカンシャー方言の全体的な特徴の主要なものの一つは、母音の開音傾向にある。標準音の二重母音は閉音傾向にあるが、この方言ではそれは開音化に向う。¹² この点を合せて考えると、テニスにおいて [ɪ] が [e] ([ɛ] ではないにしても) 程度に多少の開音化を伴ったとしても納得がゆく。しかし、これは彼独自の傾向であったかも知れない。被験者による調査ではこの点は明らかでないからである。

5. /r/ LA /ɾ/ LA

子音のうちで標準音とリンカンシャー方言を比較して最も顕著な違いは /r/ にある。通常標準音では無摩擦音 [ɹ] が使われる。しかし時として、はたき音 [ɾ] が用いられる。例えば、'Mary'、'dry' 等の単語にこの音が使われる傾向にある。

リンカンシャー方言の Irɪ は通常巻舌音 [ɹ] が使用されると思われる。しかし、私の調査では、スコットランド方言のあるタイプ(私が調べたのはエアシャーの方言)の中で使われる [r] よりは、摩擦の程度が低くなるようである。テニス自身の場合は、明確な強い音であったとC・テニスは断言している。¹³

次に、この方言では反舌音 [ɾ] または [ə, ɜ] が例外なく使用される。この「r音色」('Colouring') と呼ばれる現象が第二の明確な特色である。例えば、'part' [pɑɾt], 'mother' ['mɔðəɾ] ([mʌðəɾ] ではない) となる。

テニスの作品中では、前出「シャーロット姫」からの引用が含まれる個所が好例の一つである。

From the bank and from the river
He flashed into the crystal mirror,
Tirra lirra, 'by the river
Sang Sir Lancelot.

上記二種類の /r/ がここでは好妙に配置され('crystal' の 'r' は異なるが)、これらの音が流音であることと、前母音の効果があいまってランスロット姫の動きが鮮かに表現されている。

全体的に見て、リンカンシャー方言の子音は標準音に比較して、強く発音されるという印象を私は持った。他の要素と共に今後の分析にまきたい。

以上、テニス自身の発音の主要な特徴に簡単に検討を加えたが、リンカンシャー方言一般については機会をあらためて発表するつもりである。

IV

テニスンが時代を越えて偉大であることは疑いない。この詩人の名声は後半生において定まったのであるが、彼の詩人としての真価の本質を見抜き、客観的に評価を与えた一人に同時代に生き夭折した天才的詩人 C・M・ホブキンズがいる。彼は友人への手紙の中で数回テニスンに言及している。

...he is a glorious poet and all he does is chryselephantine.¹⁴
さらに彼は的確にテニスンの本質を語る。

... his gift of utterance is truly golden, but go further home and you come to thoughts commonplace and wanting in nobility.¹⁵

この時代においてホブキンズ程、英語の言語、音声面とその技巧に対して鋭い論理と洞察力を持った詩人は、あるいは存在しなかったかも知れない。確かにテニスンの詩の内容には、画期的要素は見られないし、特別に哲学的深さも存在しないかも知れない。彼の偉大さは、その音声的技巧に存在するのである。従って、内容のみを重視する研究だけでは彼の真価はその姿を決して現わさないであろう。従来の英詩研究においては、余りにも内容研究に傾き過ぎるきらいがあった。近年、相当期間彼が忘れられたような存在であったのも、その原因はこの点にあったと思われる。そして、言語的・音声的接近が要請される理由もまさにこの点にあるのである。その基礎として、テニスンの発音に対する研究が必須となることも必然的な帰結である。

(ノートルダム清心女子大学英文学科助教授、英国テニスン学会終身会員)

— 注 —

※この論文は、私が英国政府奨学生 (British Council Scholar) として 1973 年秋より一年間ロンドン大学へ留学し、英国で行なった調査の一部をまとめたものである。なお、その骨子の重要な部分は 1974 年度の西日本言語学会で発表した。

1. 'On Reading Tennyson', *Six Tennyson Essays* (London, 1954).
2. C. Tennyson, *Alfred Tennyson* (London, 1968), P. 56.
3. *Memoir*, ii, p. 203.
4. *Memoir*, i, p. 187.
5. *Memoir*, i, p. 194.
6. C. Ricks, ed., *The poems of Tennyson* (London, 1969). 以下詩の引用はこの版による。
7. G. E. Campion, *A Tennyson Dialect Glossary* (Lincoln, 1972), ii.

8. これは昨年7月9日ユニヴァーシティー・コレヂで二人に会い質問した時の答であった。
9. Memoir, ii, p. 203.
10. *A Tennyson Dialect Glossary*, ii
11. *Six Tennyson Essays*, p. 191.
12. この論理は厳密ではなく、むしろ音素論的である。
13. *Six Tennyson Essays*, p. 191.
14. *The Correspondence of Gerard Manley Hopkins and Richard Watson Dixon* (London, 1955), p. 25.
15. *The Letters of Gerard Manley Hopkins to Robert Bridges* (London, 1955), p. 95.
 - 1) six Tennyson Essays, P. 190.
 - 2) Alfred Lerd Tennyson: A Memoir (London, 1897).
 - 3) 同上, P. 10